

氏名	ミズノ ジュンコ 水野 淳子
学位の種類	博士 (美術)
学位記番号	博美第323号
学位授与年月日	平成23年3月25日
学位論文等題目	〈作品〉侵食、花と針、視線 〈論文〉『はかなさの戯画』
論文等審査委員	
(主査)	東京芸術大学 教授 (美術学部) 梅原 幸雄
(論文第1副査)	〃 〃 (〃) 佐藤 道信
(作品第1副査)	〃 〃 (〃) 関 出
(副査)	〃 〃 (〃) 手塚 雄二
(〃)	〃 准教授 (〃) 齋藤 典彦

(論文内容の要旨)

本論文は、私がモチーフとしてしばしば取りあげてきた蛇と蛙について考察し、それらを描く意義と可能性について推察するものである。蛇と蛙、いわゆる爬虫類と両生類には体毛がないが、私がこれらの動物に魅せられた理由のひとつにこの「体毛のなさ」がある。

蛇についてはまた、人間にとって神格化された存在であると同時に、忌み嫌われ否定的な意味を持ち合わせている点あげられる。それは多くの神話や寓話、宗教の説話などが物語っているが、このような両義的な受けとめられ方がなされる不可思議な存在感に、私は強く惹きつけられた。蛇は、かつて人間たちから、脱皮することによって永久に生まれ変わる不死の存在と見なされ、永遠の象徴として畏敬の念を抱かれてきた。閉じない顔の中の鋭い瞳や、無表情な顔などの生態から見ても、蛇はどこか格上の存在を思わせる。こうした蛇の存在を描くことで、私が日々違和感を感じている「はかなさ」への共感と心情に苦言を呈することができるのではないかと考えた。

一方で、蛙については、実に人間味があるという点に魅了された。蛙の容姿は、四足歩行で目は飛び出ており、口は大きく、人間とは似ても似つかない。しかし種類によっては、図々しいあるいはゴマをすっている人間や、無邪気な子どもに見えてしかたないのだ。蛙を見ていると、実際人間よりも人間らしく、感情や心情という内部をさらけ出している生物に思えてならない。また、人間との類似性は、集団的な群れにおいても通じているように感じられる。こうした蛙の特徴を活かしながら、「はかなさ」に群れる蛙の表現によって、「はかなさ」に「興じる」人間の心理を描き出し、戯画として表すことを意図している。

私は、古来の和歌に詠われた「はかない美しさ」というものに違和感がある。例えば、満開の桜、紅葉、満月などの移ろい行く姿に美しさを感じることは、自虐的な志向に思えてならない。散る、終わるということが、もうすぐ先の出来事として起こるということを知っているにもかかわらず、多くの人はそれを美しいと形容する。私にとっては悲哀感しか残らず、むしろ見ないでいた方が気持ちは晴れやかである。

また、この日本の「伝統」とも言うべき「はかなさ」の心情は、変化しているように思う。それは、「はかない美」に思いを寄せることなく、ただ「はかなさ」へと「興じる」志向である。美しい花として桜を愛でる習慣が生まれたのは奈良時代と言われているが、その後、平安時代に主流となり、貴族から武士が支配する時代へと変化した平安時代後期～安土桃山時代においても、多少異なるものの、依然

として貴族や武士などの一部の人々の文化であった。それが太平の世である江戸時代に広く庶民の中に広がり、「花より団子」の精神と、「はかなさ」を余興として「興じる」趣向へと移行していったのではないか。それは、世間一般の集団心理から生まれた、表面的に取り繕われた仮面のような感情である。私は、この「はかなさ」へと「興じる」志向についてもまた、嫌悪感を抱いている。

この「古来の和歌のはかなさ」や「近世以降のはかなさ」への違和感や嫌悪感を、効果的かつ的確に表現するために試行錯誤を繰り返してきた結果、ひとつの表現方法として戯画の手法を選択した。「はかなさ」に対する違和感や嫌悪感を画面に表すには、写実的な描写よりもむしろ、皮肉として描き出す方が効力を発揮できるように思う。

そこで、戯画のモチーフとしたのが蛇と蛙である。まず、両者の関係が捕食関係にあることは周知の事実のため、力関係を逆転させた「逆さまの世界」の戯画の手法を用いて描くことを試みた。しかし、これだけでは私自身の苦痛を払拭することは出来なかったため、試行錯誤の末、もうひとつの「現実を誇張する手法」をも画面に取り入れることによって、明快かつ確実に、「はかなさの美」に対する私の苦痛を払拭することに近づいている。つまり、蛙が蛇に打ち勝つ姿や、蛙が「はかない美」に群がる姿といった複数の意味を画面に持たせることによって、「はかない美への苦痛」を払拭する世界観を、風刺的かつ皮肉的に描き出せるのではないかと考えるに至った。

第1章では、蛇と蛙の生態と存在に焦点を当て、それぞれについて詳しく言及する。蛇については、生態の特徴や宗教上の意味、様々な神話や寓話から、蛇がどのような役割を果たしているかなどをまとめ、私自身の主観と比較して検証した。また蛙についても、生態の特徴をはじめ、様々な文献に登場する蛙の存在を探った。また、動物観相学の観点から、蛙の表情と人間の表情の類似性を独自の視点で検証した。

第2章では、「はかなさ」の美德感情に対する苦痛について言及した。「古来の和歌のはかなさ」と「近世以降のはかなさ」を比較し、その変化と違いについて考察した。また「近世以降のはかなさ」について、私の「はかない美しさに対する苦痛」の境界線を明示するために図式化を行い、描くべき主題の再検討を試みた。そしてそれらを表現するために、戯画に行き着いた経緯とその魅力について言及し、なかでも2つの手法を紹介した。それは「逆さまの世界」と「現実を誇張する手法」であり、これらを使い、いかに私自身の苦痛を払拭する画面を構築できるか、その過程と結果を示している。そして、画面に登場するものの役割を明確にするべく、蛙、「はかないもの」、人物、蛇の四者の関係を図式化しながら、「はかなさの戯画」について考察した。

第3章では、自作品についての解説を行った。提出作品3点について、第2章で明らかにした四者の関係性、またそれぞれのモチーフの意味や画面構成について解説している。

(博士論文審査結果の要旨)

筆者のテーマ設定は少し変わっている。筆者は、桜に代表されるような「はかなさの美」が苦痛だという。鮮やかなまま散る桜花に、「終わっていない生」の悲壮感を感じる筆者は、それへの讚美や共感はずるい、また「はかなさ」に興じる花見には「伝統」のすりこみを感じるらしい。その讚美と遊興への批判を、蛇と蛙による戯画として描き出そうとした筆者の試みを論じたのが、本論文である。

まず筆者は「はかなさの美」と遊興の起源をさぐる。美しい花を愛でる習慣は古くからあるが、平安文学に見る花の代表格は、桜よりむしろ梅だという。それが武士の時代に、散り際の潔さから桜が支持されるようになり、豊臣秀臣の「醍醐の花見」を経て、近世に花見が広く庶民にまで余興として広まったのだとする。では筆者にとって、どのようなモチーフが「はかなさ」を感じさせ、あるいは感じさせないのか。筆者はそれを表にして自己分析し、「はかなさ」「はかなくなさ」を横軸に、「自然」「人工」を縦軸にとって、様々なモチーフを各所に配置する。それによれば、もっとも違和感のある「はかない」

モチーフは、桜の花や紅葉、日食など、人々が余興として騒ぎ立てるもの。逆にじっくりくるのが、樹の幹や根など、人々に注目されることなく自然に生を終える植物であることがわかる。きわめて私的な嗜好の分析だが面白い。

次に、「はかなさ」の美学を批判する方法として筆者が選択した、「戯画」の手法について分析する。グランヴィル、フィリボンなど19世紀フランスのカリカチュアや、河鍋暁斎など明治期の日本の浮世絵を引用しながら、戯画の手法を「現実の誇張」と「逆さまの世界」の二つに分類し、後者を選択する。

そしてその戯画を演ずる主役のモチーフとして筆者が選んでいるのが、蛇と蛙である。両者の間には、蛇が蛙を食べるという捕食関係、いわば強者と弱者の関係があり、「逆さまの世界」を描くには都合がいい。しかも蛙は、人なつこい風貌から、余興に群れ騒ぐ人間の比喻に適し、畏怖と嫌悪の対象である蛇は、その表情の読めなさから、不変の価値の象徴としても使える。それに人物を加えた実際の作品には、やや寓意の混線も見られるが、造形とイメージの強度は強い。

本論文は、構成としては、まず蛇と蛙を筆者が好む理由と、両者の生態や歴史的な理解、次いで「はかなさの美」への違和感と、その表現としての戯画、そして自身の作品の解説へと展開している。蛇と蛙への関心が冒頭に述べられることからすれば、それらへの関心と「はかなさの美」への違和感は、あるいは当初別々の問題としてあったものを、作品化の時点でテーマとモチーフとして整合したものだったのかもしれない。結果、嫌いなテーマを、好きなモチーフで描いた作品になっていると言える。

常識的見解に敢然と異を唱える本論文のテーマは、一見アクの強い主張にも聞こえるが、論述はむしろ率直で力強い。筆者のイメージ力の強さを示しこそすれ、奇をてらう感はなく、造形者自身の世界観をストレートに論じた好論として、査読者一同の高い評価を得た。

(作品審査結果の要旨)

本研究作品「侵食」「花と針」「視線」は、申請者自身の論法を基底とした研究成果となっている。その見解は、一般的に享受されている〈はかない美〉への違和感や、異論を抱くところから展開しており、そこに主観としての独自性が発揮された作品が成立する主な要素が認められる。自身の絵画表現を、一種の冷評性を含む〈戯画〉として位置付ける申請者は、爬虫類であるヘビや両生類であるカエルを象徴的な存在と見立てて、想念を描き出そうと意欲的な試みを続けてきた。ヘビの視軸を支えるのは申請者の批評眼と観察力によるものなのか、制作の背後に存在する考えが興味深い。

「侵食」と題した作品の画面中央には、多様な生命体が混在する様子を塊として描き、右側には浮遊する女性を配置している。そこには重力や空間の説明要素はなく、平面的に爬虫類と植物、そして人物が描き出されている。アジサイの周りに集まる爬虫類（ヘビ／トカゲ／カメ／カメレオン）の姿は、はかないものに群がり〈興じる〉という人間の習性を表象化し、耳をふさぎ聞かぬふりをする人間を並置するなど、布置結構に工夫の跡が見て取れる。複雑に込み入った部分には、多くの色彩が加えられているが、全体的には明度差のある灰色系で各領域が構成されており、その様相はさまざまに考え練られた成果によるものと高く評価できる。「花と針」は、正方形の画面で自身が抱く〈はかない美〉への違和感を、戯画として表現しようと試みた実験作である。サボテンと人間、そしてカエルと巨大なヘビが入り混じる存在は、意図するの中心とは別な象形的暗示をも印象付ける作品となり、奇怪な魅力に富んでいる。「視線」は、戯画としての表現を端的に示したいと申請者が追求した結果、洗練度が増した優作である。全体が灰色の諧調の妙を湛え、質感や粗密の幅が効果的で画想の深化を感じさせた。中央の薄青い塊、その群がりの周りをヘビが取り囲み、複数のヘビの頭が画面外から入り込む構図となり、これらヘビの冷静な視線こそを自身の主眼点と擬した。

申請者は、一貫した研究の蓄積による成果を収めており、今後の展開と充実が大いに期待されている。審査会において、申請者の一連の作品を学位水準に達し優れているものと全員一致して高く評価し、合

格と判定した。

(総合審査結果の要旨)

申請者は、東京藝術大学絵画科日本画を卒業後、大学院修士課程を首席で修了、修了作品は大学買い上げとなり、博士課程に進んだ。修士課程・博士課程を通じて多く、蛇・蛙などの爬虫類・両生類を題材に描いている。その作品から感じとれる空気は美しく澄んだ独自の世界があり、それは魅力的で興味深いものである。博士課程論文では、自作品の生まれる過程で、申請者の心の中を分析し、そこに流れるものを「はかなさの戯画」と題し、幼児期の体験の中から、毛のある動物への嫌悪感、体毛の無いものへ魅せられた理由等を考察してきた。

学位論文に取りかかった2010年以降、「はかなさ」に対しての独自の天の邪鬼の性格による解釈が一層明確化し、魅力的で完成度の高い作品が生まれてきている。申請者の抱く、はかない美しさに対する違和感は、多くの日本画で描かれてきた、四季の移ろいの中の満開の桜・紅葉・満月などの、多くの人が美しいと形容するものに対する興じる志向への苦痛表現なのかもしれない。

提出作品 1：侵食（170×225cm 2009年） 2：花と針（162×162cm 2010年） 3：視線（170×334cm 2010年） は一作ごとに完成度が高くなり、その魅力及び完成度が上がり、その魅力になってきている。その風刺的、及び戯画的な表現はおさえられ、全作品を通して、より静かに愛情深く優しいイメージを感じる秀作である。

2010年10月18日論文査読会、12月8日作品審査会、2010年12月14日の大学美術館における博士審査展、公开发表後、口述最終試験を経て、提出された博士論文及び作品とともに、博士学位水準に達し優れていると判断し総合審査を合格と判定した。